

パネルディスカッション『生涯学習を支える基盤とは何か』

日時：2009年6月13日（土）

場所：東京大学教育学部 158 教室

パネリスト： アジア太平洋資料センター（PARC） 事務局長 内田聖子
野外教育研究財団 理事長 羽場睦美
滋賀県愛荘町 教育長・前図書館長 渡部幹雄
司会： 生涯学習基盤経営コース 教授 根本彰

パネリスト紹介
内田聖子（うちだ・しょうこ） 特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）事務局長 慶應義塾大学文学部人間関係学科を卒業後、株式会社明石書店等で雑誌、単行本の編集に携わる（人権、環境、ジェンダー等の単行本の企画・編集）。アジア太平洋資料センターにて月刊雑誌『オルタ』の編集担当。2006年から同センター事務局長に就任。現在に至る。現在は、「連帯経済」に関する調査研究等に取り組む。
羽場睦美（はば・むつみ）（財）野外教育研究財団理事長 長野県泰阜（やすおか）村生まれ。私財を投じ野外教育研究財団を設立、野外教育・研究・講演・地域活動開始。40代で青年期の読書の蓄積が役に立たなくなってきたことを感じ放送大学入学卒業。その後名古屋大学大学院を受験、修士修了、現在博士後期課程在学。 著書 『信州の人と鉄』信濃毎日新聞社 1996（共著） 『金属と地名』三一書房 1998（共著） 『参画・体験・発見学習の心理と応用』野外教育研究財団 2003
渡部幹雄（わたなべ・みきお）滋賀県愛知郡愛荘町教育長・前図書館長 東京学芸大学大学院修了。大学を卒業した後、故郷の大分県緒方町で社会教育主事、博物館学芸員、図書館司書を歴任。その後、請われて長崎県森山町、滋賀県愛知川町へと赴き、それぞれの地で図書館づくりに奮闘。2008年3月、愛知川町と秦荘町が合併してできた愛荘町教育長に就任。著書 『図書館を遊ぶ～エンターテイメント空間を求めて』新評論 2003 『地域と図書館～図書館の未来のために』慧文社 2006

1 はじめに

根本： このコースに教員が3名いますが、その中で一番長く、ここに来てもう15年になります。東京大学教育学部あるいは教育学研究科が、この15年でどのように変化してきたかということも見てきています。年配の方のなかにはご承知の方もいると思いますが、東大教育学部はもともと非

常に現場志向が強く、教育現場とつながりながらいろいろなことをやっている伝統がありました。が、この20年くらいは個別にかかわることはあったにせよ、だいぶ変わったように思います。私は図書館を専門にしていますが、社会教育の研究室は長いこと長野県のフィールドとのつながりがありました。そういう伝統は切らせたくないということがあり、今はスタッフが変わってしまいま

したが、もう一度現場との関係をつくり直そうということがわれわれの意図としてあります。

それと同時に、生涯学習基盤経営という非常に長つたらしく、よく分からない概念を掲げて今われわれはやろうとしています。3名ともそれぞれ専門としている対象や方法も随分違いますが、このような大きな枠組みの中で今後ともやっていきたい、そのときにやはり現場との関係を意識したいということで、今回は3名の方をお呼びしました。

それでは最初に、3名のパネリストの方をご紹介します。

まず、特定非営活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）事務局長の内田聖子さんです。このアジア太平洋資料センターというのは武藤一羊さんの名前とともに昔から聞いていました。個人的関心から前から疑問に思っていたのは、資料という言葉がなぜ付いているかというあたりです。PARC（Pacific Asia Resource Center）のRがResourceとなっていますから、広い意味での資料なのでしょうか。その辺のところも含めてお話しただければと思います。

次に、財団法人野外教育研究財団理事長の羽場睦美さんです。私どもの研究室で、牧野先生が去年夏休みに学生を連れて長野県の阿智村を訪れて調査した際にはいろいろお世話になっています。ご経歴を拝見すると、ご自身が本当に生涯学習を体現されている方のように思います。ぜひどういう活動をされているかということと、ご自身のご経験から生涯学習とは何かということも含めてお話しください。

それから、滋賀県愛知郡愛荘町教育長、前図書館長の渡部幹雄さんです。昔から渡部さんのことをいろいろ存じ上げており、地域の中に根差した非常に幅広い活動で実績を上げられて、本もいろいろと書かれている方です。ご本意かどうか分かりませんが、今は教育長という要職をされています。ぜひ図書館、社会教育の基盤、生涯学習の基盤を公的に設置されている立場からそれらの可能性も含めてお話しください。

ではまずは、1人15分程度お話しただこうと思います。内田さんからよろしくお願いします。

2 内田聖子「アジア太平洋資料センター（PARC）」について

内田： 今ご紹介をいただきました特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）は、確かなに「資料」と付いているかということは、自分たちでやっているのを忘れてしまいますが、疑問に思われるとおりの長い名前です。NGOあるいは今はNPO、両方の団体として活動しています。私は、そこで今事務局長をしています内田聖子と申します。よろしくお願いします。

限られた時間なので、私たちの活動を通して、NGO、NPOが社会の中でどういう活動をしているかということをお話しします。

まず、今先生からご指摘もありましたが、なぜ資料とされているかというと、これはとても簡単でもあり、また、とても長い話でもあります。私どもの団体は1973年から活動をしています。恐らくここにいる多くの方よりは年を取っている団体だと思います。昨年で35年を迎えました。もともとの成り立ちですが、発足当時はベトナム戦争が起こってしまっていて、それに対する世界的な反戦運動——ベトナム反戦運動が起こっていました。その当時、日本では同時に公害の問題や日米安保条約反対運動などがあり、大学ではいわゆる学生運動が活発にあった時代でした。

その中で、私どもの設立者の何人かは、ベトナム戦争に反対する運動をベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）を立ち上げに関わりまして、とても幅広い市民の反戦運動が日本の中でも起こっていました。作家の小田実さんや、今ご指摘もありました武藤一羊さんなど、今の70代ぐらいの方々が市民運動として立ち上げた団体が、私たちのアジア太平洋資料センターです。

まず何をやったかということ、日本の中でいろいろ起こっている運動や問題を英語で記事を書いて、雑誌を作りました。これは英文『AMPO』といいます。もうかなり前の30年前から出していて、海外に発信していました。当時は日本の中で市民運動として英語で記事が書ける人は大変少なかったもので、これは大変貴重で、自分たちで製本し、それを海外に送付していました。当時はやはりアジア全体が民主化の時代であり、それに伴ういろいろな市民活動や政治活動がありましたので、その草の根の人たちと日本の市民がつながっていく媒体としての役割を果たしてきました。

70年代はインターネットなどありませんので、基本的には私たちが雑誌やニュースレターを作って送ったりしました。逆に、かなり広いアジア全

体の国々から、同じように資料——ニュースレターやピラが事務所に日々届いていました。最初はそれを集めて保管して、そして誰でも来て見ていいという場であり、またそういう書籍づくりをやっていたことから資料とっていました。

四ッ谷かどこかの6畳一間ぐらいのアパートを借りていたと聞いていますが、床が抜けるほど紙の資料が段ボールにぼんぼんぼんと重なって、とてもじゃないけれど、資料センターという名前はちょっと違うのではないかという状態でした。とにかくアジア各国、あるいは世界各国から基本的には市民活動、それからジャーナリストやアカデミストの人たちの論文や記事を集めていたことから、資料センターという名前が付いています。

とはいえ、活動を35年もやってきていますので、今は活動の幅が広がり本当にいろいろな活動をしています。今日の生涯教育、生涯学習というテーマが一番近いと思ったのが、PARC自由学校です。これは基本的には社会人の方がたくさん来てくださっている講座で、毎年やっています。しかし、ただ学校をやっているという団体では決してありません。私たちは市民社会の中で市民活動として活動していますので、大学でも行政機関でもありません。ただ何か知識を学んで、よかったというだけではなくて、今社会の中にはたくさんいろいろな課題や問題がありますが、自分たちが学んだり、人と出会ったり、関係を持ったりすることを通じて、まず自分たちが変わっていく。学びというのはやはり、何か吸収して自分が変わっていく、その繰り返しだろうと、私たちは思っています。かつ、社会にあるいろいろな課題や問題を解決していく主体になることが、私たちにとっての学びで、そこがなければ全く意味がないと考えています。その意味で自由学校というのはいろいろな言い方ができますが、学びの場であることは事実です。そして、たくさんの人が来てくれます。しかし、もう少し先には、自分自身が学ぶことを通していろいろな課題を解決していく主体になる、そういう人材を社会の中に1人でも多くつくり出していくことが、私たちの自由学校の目的でもあり、アジア太平洋資料センターそのものの目的でもあります。

今日は現場ということが1つのキーワードになると思います。特に私たちのように国際問題を多く扱っているNGOやNPOの現場というと、実は地域で活動している方々と比較すると、現場と

言えるものがなかなか見あたらないというのが率直なところです。例えば後でお話になるお二人は、それぞれ地域の中で現場を持っていらっしゃると思いますが、私たちにとっての現場とは、とても広くいうと日本全体、世界全体という話になり、とても狭くいうと東京都の淡路町にある自分たちが活動している事務所ともいえます。

その意味では、私たちは常に現場を持っている方々とながらつながってなければプログラム1つ組みませんし、何か社会を変えていくきっかけもできません。そこがいつもジレンマですが、私たち自身は、自分たちをいろいろな意味での媒体だという規定をすることがあります。要するに何かと何かをつなぐ1つのメカニズムであり、一人一人のスタッフもそうですし、こういう学校に来てくれる生徒さん一人一人も、主体であり媒体であると話すことがあります。

ですから、大学や地域で現場を持っていらっしゃる方々と、いつも出会う機会を探していますし、もはや大学、NPO、行政などという非常に限られた中でセクト的にやっていくこともおかしいと思いますので、いろいろなチャンネルを持ってつながっていくことを考えています。例えば今は農業の問題もありますし、それから東京で今私たちが取り組んでいるのが、若者と仕事と貧困の問題です。やはりフリーターや派遣切りされた方々など、そういう深刻な問題はたくさんあるので、いろいろな壁を越えてつながりながら解決していく。そのために提供しているプログラムが、自由学校です。

もう一つ、大学との直接のかかわりとしては、ここ数年、大学院生や大学生でインターンやボランティアをしたいという方がとても増えています。本当に有り難い限りです。それがまた1つの媒体として、活動に参加いただいたり、一緒にキャンペーンや調査をやったりしています。

そこでよく感じるの、大学の中だけではその人自身も満足できていないのかなということ。「大学は面白くない」と言ってNGOに来る方が多いです。「毎日何をやっているの?」と聞くと、「授業を聞いてもつまらないし、サークルにも一応入っているけれどもそれもいまいちだし」と言うわけです。つまりここで私たちがよく取り扱っているような、例えば食糧の問題、雇用、貧困の問題を大学では普通に話されているわけではないのですが、それは先生方、どうなのでしょう。だからNGOに来て、こういうことをやり

たいと言われると、大学は普通そういう話をして研究テーマを見つけてやるところではないかと、自分はやっていなかったのを棚に上げて、思っています。社会とつながる回路が今大学の中にどのくらいあるのかということは私自身もすごく疑問です。その結果として NGO にいろいろな方が来てくれるのは大変有り難いことですが、逆に言うと大学という場が社会とどうつながって、現場やいろいろな世界とどうつながりながらどういう学びをやっているのかということは、むしろとても聞きたいと思います。また、できればそれを一緒にやっていく枠組みができればいいのではないかと思っています。

私たちにとっての現場は社会全体だと言いましたが、とても具体的に言うと、例えば今年は、コンビニエンスストアの調査や、魚の流通や、アジアの小漁民の状況を調査します。その場合、やはり現場にまず出掛けていきますが、コンビニだとその辺にありますので、行っているいろいろな商品調査をしたり、それが今のグローバリゼーションの問題とどのようにつながっているのかということ、足を歩いて、自分たちが苦労して調査をしていきます。それも大学のフィールドワークや研究活動で恐らく皆さんやっているのだと思いますが、私たちはいろいろな事実を知った上で、どうやって変えていくかという部分をとても大事にしていますので、大学ではどうなっているかぜひ教えてください。そこでいろいろな年代やいろいろな経験を持つ人たちが日々学んだり、出入りしたり、仲間をつくって、自分が変わっていく、そういう循環をつくろうと考えています。

私たちだけではなく、NGO、NPO はたくさんありますし、得意なジャンル、テーマを持っている団体もたくさんありますので、大学だけではなく、市民活動として足を運んで活動にちょっとでも参加すると、恐らく大学での学びも充実してくると思います。それから NGO のいいところは、良くも悪くもいろいろな人がごちゃっといいて、いろいろなテーマを抱えて、日々ごたごたしながら、でもやはり解決していこうという力があるところだと思いますので、PARC 自由学校はもちろんですが、いろいろな活動にぜひご参加いただきたいと思っています。

根本： ありがとうございます。なぜ資料が付いているのか、よく分かりました。資料を集める活動つまり情報センター的な活動から始まったと

いうのは、非常に興味深く伺いました。私も情報を集め集約し発信する、さらに自らが媒体となる図書館的な活動をする社会運動組織を幾つか知っていますが、こういう出発点は私どもの研究テーマとも非常に密接にかかわっていると思います。また、問題意識を強くもつ学生が大学に満足できなくてこういう NPO や NGO に参加するというお話も大学に所属する一員として非常に気になる点です。そうした部分は私たちの研究領域そのものであり、相互の関係を密接に持っていきたいと思った次第です。

では、羽場さんからお話をいただきたいと思えます。

3 羽場睦美「野外教育研究財団での実践」

羽場： ご紹介いただきました羽場といいます。短い時間ですが、自分の自己紹介と、私の仕事の財団の紹介、それから生涯学習基盤について述べさせていただきます、自己紹介に代えさせていただきます。

私が生まれたところは、長野県知事だった田中康夫さんが住んだとされている、泰阜村です。この泰阜村は、田中さん以外でも有名なところで、天国が一番近い村というか、在宅医療に一生懸命で、自宅でコロナと逝ける天国に近い超高齢社会を目指す村でした。

そこで野生児として育ちますが、私はいろいろな興味がありまして、某大学で哲学や心理学をやったのですが、ろくろく勉強もせずに浪人していましたので、やがて挫折しました。完べき主義者でしたので、自分が行きかかった大学が駄目だったら、もう大学なんかやめてしまえということで、実社会に入って、苦労だらけの人生を歩んできたわけです。そして幼稚園教諭の妻と知り合って、子どもたちのキャンプをする姿を見て、そこに心理学の実践の場が展開していることに気づきました。まさに野外教育という在野の学びの場を見つけて、今日まで来たわけです。財団法人をつくって、社会教育としてのキャンプ活動や自然体験活動をやってきました。

若いころは結構本を読んだつもりです。その蓄えで 20 年間、30 年間やってきましたが、どうもネタが切れてきた、あるいは昔読んだ本が使い物にならない、知識が鈍ってきたと思うようになって

て、40代になりまして放送大学で学び直して、そして50代になってから名古屋大学大学院に進学しました。現在、前期課程が終わって、後期課程です。複雑系科学専攻科で博物館学の先生の下で研究をしている現役の院生です。

私がつくった野外教育研究財団は、子どもたちのキャンプ活動や自然体験活動を核にしている財団ですが、むしろ地域の自然や人などの資源をいかに活性化させて、さまざまな学びや事業を起こしていくかということを長野県の飯田下伊那地方という場所で研究し実践しています。

この地域は、故宮原誠一先生、そのお弟子さんの故小川利夫先生、前任者の佐藤一子先生、そして小川先生のまな弟子である牧野篤先生その他多くの東大関係者と関係をもち続けてきました。これらの先生方はこの地域の社会教育活動を現地に立ち調査研究してこられました。地域もその恩恵をもらい、その相互作用によって全国に知られる成果を上げてきました。今もって地域の公民館活動がとても盛んな地域です。

今、公民館活動は全国的に衰退してきていますが、まだ飯田下伊那では脈々と生きています。私の財団はそういった活動のお手伝いをしたり、あるいは首長さんたちのブレインやシンクタンクとして、地域での学びを通じてどうやって経済を活性化させていくかということ、一緒に考えたり、政策提言をしたりしています。

そのほかには、450名ぐらいの学生さんに集まっていたいただいて、キャンプ活動のお手伝いをさせていただくための対人対応トレーニングを全国で行ったり、自治体や教育委員会の皆さんに対してワークショップ運営技術や地域政策策定の講習会を行ったりしています。また、大学、大学院のフィールドワークや講義のお手伝いもしています。

最後に、私が今日招かれました生涯学習基盤についてどう思うか、考えを述べて終わりにします。平成元年に文部大臣西岡武夫さんが中央教育審議会に答申を求めています。その諮問は生涯学習の基盤整備についてでした。思い起こしますと、世界の生涯教育、生涯学習の流れが日本に波及してきて、政府は大慌てで大転換を図りました。生涯学習という概念をそこに入れたわけです。そしてそれ以来、放送大学、中等教育や高等教育の継続、さまざまな政策を練りながら、今まで進めてきました。その結果、制度的には優れた生涯学習社会を実現したともいえると思います。

昔だったら、例えばかつての私のように、在野の実践研究者として大学を出ないことをひとつの牙にして生きてきた人たちがたくさんいました（作家の松本清張や考古学者の藤森栄一等）。ところが今は幾つになっても学べる社会になり、そうした牙を振舞わず必然性が薄れ、私にしても牙が抜かれて随分と温和になりつつあるわけです。総じて大学で学びなおし、それを活かしていく場所も得られるようになってきました。

逆に、公民館や博物館などは本来、公教育として保障されたはずのものでしたが、自ら進んで学ぶ生涯学習ということで、公の責任を回避する傾向が現れ、税金投入を減らすという動きも同時進行しつつあるように思われます。

このような意味で、この生涯学習基盤は、いったんは確固たる決意に基づいて進みましたが、今は中だるみ状態だと思われます。この現状、すなわち成果は徐々に現れているが、しかし欠点もある、それを今後どのようにしていくかという視点が、これから生涯学習基盤を見ていく大事なポイントではないかと思えます。

根本： ありがとうございます。生涯学習基盤経営という名前が、今おっしゃった文科省の政策から来ていることは間違いありませんが、私どものコース名はいろいろ内部的な事情があって、最初は「生涯教育計画コース」といっていました。また3年前から別の事情が生じこの「生涯学習基盤経営」という名前を使い始めました。

私は名前を変えるときこの言葉の提案者の1人でもありましたが、そのときに頭にあったのは全然違うことでした。東大の工学部の各学科では名前を一新してイメージアップすることが進んでいます。昔土木工学という領域がありましたが、今それを社会基盤学といいます。東京大学工学部社会基盤学科です。全然ぴんとこないけれども、考えてみると確かにそういう言い方もあるかなと思います。基盤という言葉が気軽に使われている感じがして、その気軽さをここに導入したという経緯が若干あります。裏の話ですが、実はそういうことがあったことを今のお話で思い返しました。

それでは次に、渡部さんからお願いいたします。

4 渡部幹雄「私の生涯学習基盤論」

渡部： 渡部と申します。私も自分の紹介と生涯学習の基盤と現場についてのお話をしたいと思い

ます。

私は今滋賀県にいますが、最初に就職したのは大分県緒方町、次が長崎県森山町、途中で東京の国立にもいましたが、社会教育の現場をずっと歩いてきました。その中で私のこだわりとして、やはり地域からものを見ていく視線が大切だと思っています。主に私は地域といいますが、コミュニティの中で仕事をしてきましたが、その中で自分がどのようにその地域にかかわっていき、地域をよりよくするかという視点と、地域に愛情を持つことが絶対に必要ではないかと思い、今まで仕事をしてきました。図書館にかかわっていたのですが、去年から急きょ教育長を命ぜられ、今は現場からちょっと離れていますが、何とか学校に行ったり、いろいろなところに行ったりして、現場からの視点は失いたくないということで、毎日仕事をしています。

私は公民館、歴史民俗資料館という博物館、そして図書館と、3つの日本の代表的な社会教育施設の勤務経験を持っていますが、根底に流れているものと同じで、やはり地域をどう豊かにしていくかということだと思います。学校を中心とした教育という目で見ると、社会教育にはまだまだ日が当たってないところがあります。しかし、日が当たってないからこそそこに目を当てて、よりよくするというのは、仕事としてはやりがいがあるのではないかと。私は安易な仕事で脚光を浴びている仕事をずっと続けていくのは、あまり面白くないと思います。やはり困難なところで、困難に立ち向かって、それを改善していくものに、プロとしての仕事のやりがいを感じています。

私は昨日、愛荘町の役場から能登川という駅まで図書館の職員と一緒に車で行ったのですが、そのときに私は職員に、現状の図書館では、多くの図書館職員がゴールをある程度決めてしまっていて、そのゴールを自分たちが達成できそうなところに設定しているところに課題があるのではないかと言いましたら、納得していました。これは私の偏見ですが、やはり難しければ難しいほど仕事は本当に面白いところです。

私は学校を卒業して現場に放り出されました。その近隣の町は人口約一万人人位の小さな町でしたが、そこに九州大学の大学院を卒業された社会教育専攻の方が、あえて小さな町の公民館主事として来られました。その方のやり方が私にはとても新鮮でしたので、その方のところに押し掛けてい

って、ゼミのようなものを繰り返していました。それをその町の周辺の主事たちに広げて、定期的なそうした機会をつくっていました。いったん社会に出るとそういう学びの機会は少なくなってしまうから、その人と二人三脚で勉強した覚えがあります。その元社会教育主事は今年1月の選挙で大分県臼杵市長になっています。

そういう形で、私はずっと社会教育とかかわりを持ってきました。ただ、図書館の仕事や博物館の仕事でもそうですが、箱を造って人を育てたらそこで終わりというところがある。私のしごと館やグリーンピアもそうだと思います。私は決して箱物は悪いと思っていません。日本にはソフトがないのです。箱物にプラスしてソフトを働かせないところに問題があると思っています。だから多くの箱物は無駄遣いだと言われますが、そこが旭山動物園のようににぎわえば、皆さん異議を唱える人はいないでしょう。公共というのは平たく言えばみんなのものだと私は思います。だから公共施設でも、一部の人だけが使ったり、一部の人しか使わないものだったり、みんなのものになり得なければ批判されて無駄遣いとなってしまいますが、そこをどう生かすかという仕組みさえ作ればいいわけで、うまく動かす機能をそろえてないのが今の日本の施設の現状ではないかと思っています。だからそれを人がどのように動かして、どのように形にしていくかということだけ思いつつ、大分、長崎と府県を越えて、単なる役場の職員が施設づくりにかかわってきました。

図書館を生涯学習の基盤としてどう考えるかという、私は学校を卒業した後の生涯にわたる学びを支える装置だと思います。装置はたくさんありますが、その一つが図書館だと思っていますし、過去や現在の記録を未来へとつなぐ装置でもあるし、住民や国民を発展させる一つの装置だと思って仕事をしていました。学びたいことややりたいことは星の数ほどあると思います。そのやりたいことを実現できる橋渡しを支援する場が図書館で、ひよっとしたら博物館もそうかもしれませんが、そのような思いで私は仕事をしてきました。

子どもさんが自転車に初めて乗るときに補助輪を使いますね。補助輪を使って、自分で走行できるようになったら補助輪を外します。だから、補助輪の役割が私どもの仕事の役割だと思います。そこを支えて何とか自立していくものを育む仕事の部分が、私たちの使命ではないかと思っています

す。

とりわけ現場というのは、考えてさせる仕事ではなくて、考えてする仕事だと私は思います。させる仕事、する仕事というより、自分でして見せて、そのものを明らかにしていくというのが私の現場の立場だったと思っています。

では、図書館に人が寄り付かないと地域で言われていた中で、私がどうやって工夫したか、紹介かたがた少しスライドでお見せしたいと思います。ここにいらっしゃる方は図書館好きで、大概図書館に行かれていますと思います。だけど、図書館になじまないという方がいらっしゃいます。そういう方々をどう寄せ付けるかというのが、私の今までの仕事でした。

最初は絵本の原画展をして、作家との交流をやった風景ですが、『えほん寄席』という本がありますが、そういう本を紹介しながら、本物の落語家に来てもらい、図書館で落語をやったりして、お話をしてもらいました。

次に地域から情報を寄せて地域にバックさせる。図書館というのは、本を貸して一方的に情報を与える場ですが、市民から情報をいただいて、それをまた還元するようなことを考えました。こっちにあるのは地域のコミュニティー紙です。それを張ることにより、地域の自治会も図書館に参加する仕組みをつくりました。赤いのは、コウモリを見たというコウモリの発見情報がどんどん膨らんでいくものです。地域のコミュニティー紙がどんどん豊かになってきます。図書館は非常に日常的な空間ですから、そこに情報が来て、新聞に出ないローカルな狭いところの情報ですが、みんなそれを見ています。そういう中で図書館との距離を縮めていきます。

「観光協会だより」も小まめに集めていますし、書店並のテーマ展示をやったり、いろいろなことをやらせていただいています。これは老人会とのかかわりで、これはギャラリーです。

これは一例ですが、図書館の玄関にグランドピアノを置いています。時々、突然ピアノが鳴ったり、ジャズが演奏されたり、いろいろな仕組みを図書館に用意しています。

そのような中で、図書館の中に日常生活と同じような空間を用意して、情報が行き交うようにしています。博物館はモノと人の関係で、公民館やNPOはヒトと人の関係だと思いますが、図書館は2次資料である本と人の関係を踏まえてそうい

ったものを組み合わせて、1次資料への橋渡しやヒトとの繋がりや橋渡しの役割を果たすような空間です。

入館者数は、今の段階では開館以来ずっと右肩上がりや伸びていまして、昨年の4月と今年の4月を比べると20%増です。ずっと利用者は伸びています。だから、造ったときにゴールではありません。こういう施設などは造ったときにスタートで、それから膨らませていくことを、地域との関係を築きながら今までやってきました。

5 補足の質疑

根本： ありがとうございます。最初のお二方は、どちらかという市民の立場からのお話で、渡部さんからは公的なもののこれまでの限界と、それからそれをどのように作り直していくかというご提案がいただけたと思います。

私は地域資料というのを前から研究していますが、渡部さんのところに一度お邪魔しているいろいろお話を伺ったり、そこでやられていることを見学させていただきました。今コウモリがどこで見られたかを地域内でマッピングするというお話をされていましたが、ああいうことは科学博物館などで結構やられている事業だと思います。これを図書館でやる。つまりそれは地域の情報だということです。地域情報は別に印刷物などに限らず、住民から寄せられる情報を整理し直すようなところも含めて非常に重要な地域情報サービスだという位置付けからそういう仕事をされていることは、非常に興味深いし、面白いと思いました。

今お三方にお話しいただきましたが、補足なり、ほかの方のお話を聞かれた上で何かコメントなどありましたらお願いします。

渡部： 補足ですが、私のイメージしている図書館は、最終的に利用者が本を書いて、私の図書館に置き、それが貸し出される風景です。それが今実現しています。私も本を書いています、住民も本を書いて、小学生も本を書いて、貸し出しする。だから単なる情報の提供ではなくて、総合構成を考えています。

根本： 今のお話で思い出しましたが、地域資料の研究をやったときに、小さな地域の単位である字（あざ）を単位にした歴史（字史、字誌）を作っているところは、昔はもっとあったのかもしれませんが、今は沖縄と滋賀県だけだという話を聞

きました。つまり字という非常に小さな地域的な単位で、そこに住んでいる人たちが積極的に今でも自ら歴史を書いている。今のお話は、もしかしたらそういうことともつながりがあるのかもしれないし、町史が編さんされていることも含めて、行政と住民という関係だけではなく、住民どうしの間をつなぐ役割を図書館なり公共的な機関が成すというお話だと伺いました。

この後はディスカッションにしたいと思いますが、最初に申しましたように、生涯学習基盤経営とは何か、最初にこちらで考えたところでも特にまとまったアイデアがあるわけでもないの、自由に意見を言ってください。

まず、こういう点について補足してほしいという質問等はございますか。

質問者1： 教育学部4年のものです。羽場さんの大学院に3月に勉強に行かせていただきました。それに関連して、今後どういった内容を大学院で講義としてやられていくのか興味がありましたので、ぜひ教えてください。

羽場： おっしゃった『大学院』は正式な大学院ではなくて、私たちがやっている森森大学院という市民講座です。実は自己紹介の中で多くのことをはしょっていますので、森森大学院のことも紹介しながら補足させていただきます。

私のやっている仕事として、飯田市かざこし子どもの森公園という体験型公園の管理運営があります。これは造る過程から市と一緒に積み上げてきたものです。最終的には市が財団をつくって管理運営する予定でしたが、行革のあおりで財団をつくることができず、私たちの財団で受けることになりました。そこは、図書館でもない、博物館でもないのに、子どもの読み聞かせをしたり、さまざまな展示をしたりしています。ですから、領域侵犯というか、博物館が図書館に近づき、図書館が博物館に近づくようなことは私にはごく自然なことに思えます。私は修士論文で、博物館、図書館、公民館、あるいは地域のさまざまな資源をネットワークでつないで、地域のための市民のための大学をつくってしまおうという設計研究をしました。実はそのパイロット研究的な意味もありまして、この公園で、子ども向けと、青少年教育者向けの講座を設けています。成人向けの講座を森森大学院と呼んでいます。大学の単位に換算すると2単位ぐらいになるような内容です。

私たちはグリーン・インテリジェンスとあって、

知性は自然の中で汗をかいて磨こうという考え方をもっていて、グリーンシーズンには修士や博士の学位を持った若者たちが草刈や子どもたちの体験活動支援をしながら過ごし、冬になると公開市民講座を開きます。

今の質問者の方はその中の「戦略策定と政策評価」という講座に出てくださったんですね。これを今後どうするかということですが、これ自体は今後も継続したいと思っています。そして、そういった講座を少しずつ膨らませていきたいと思っています。将来的には、地域政策を立案していくような、例えば飯田下伊那に培われてきた様々な資源、ハート、ソフト、ハードを使って、地域のために役立つ政策をみんなで考えだしていくような講座をつくっていききたいと思っています。

6 地域の生涯学習を支える行政の役割

質問者2： 神奈川県横浜市都筑区にあります都築図書館という地域図書館の友の会とかかかわっています。

最近市民との協働ということ横浜も言い出しています、今ちょうど都築図書館と協働で何か企画しようという話があります。まだ図書館は上手につながれないというか、市民をまだ信用していないという言い方は変ですが、いろいろなことを言われるんじゃないかというようなところがあります。うちの場合はだいぶ昔からつながりがあったので、まず友の会と一緒につながるところから始めようということですが、友の会だけではなくて、できれば地域のいろいろなところとつながって、図書館を支えていきたいと思っています。そのときの持っていく方ではありませんが、例えば図書館の人にどういうことをしてもらおうと地域とつながりやすいのか、NPOでご活動されていて、こういうところにこのように働き掛けていくとうまくみんなをつなげ、社会教育の場としてつながっていけるということを、ご経験から3人の方にアドバイスをいただければと思います。

内田： おっしゃることはとてもよく分かります。特に私たちのような市民活動はある種の国家や国際機関に対しての政策提言や批判活動も含まれるので、その意味では私たちは市民はすごく信用しているけれども、国や大学や行政はまだ不信という、すごく逆な感じがします。しかし、具体的な

一人一人の人——担当者の方や図書館の方と話してみると、実はすごく近いことを考えていたということはとてもよくあります。

私たちのようなNPO、NGOからすると、地域の中で生きている暮らしの現場、住民一人一人が集えるような場をお持ちということは、とても素晴らしいし、うらやましいと思う点です。逆に言うと、図書館の方は、アジアの現場の話やグローバルイシュー的なことはまだよく分からないと言われるので、例えば私たちと協働して、NGOのスタッフなり専門家が行って幾つかの勉強会のようなことを図書館で、今日のような形で地域の方の方に対して行います。例えば今の食べ物のグローバル化の問題はどうなっているのか、私たちが日々食べているお魚や肉は一体どこで誰がつくって、どうやって運ばれるのかというような、難しいことばかり言ってもつまらないので、生活の中でそれを世界の構造として読み取っていくような講座を開いたこともあります。

私たちの活動の1つとして、アジアの現場を支える住民支援活動、いわゆる国際協力活動もしています。例えば東ティモールというすごく小さなアジアの国でコーヒー生産者の支援をしていて、フェアトレードコーヒーとして日本で輸入して販売しています。今フェアトレードは、学生さんも含めてすごく意識が高くなってみんなよく知っているの、例えばコーヒーを飲みながら、生産者はこんな暮らしをしているとか話します。

そうやって協働で講座を企画するというは、NPOやNGOもそういう場をととても求めていますので、どんどん電話をして、こういう活動を一緒にやりたいと言えば、NGO、NPOは本当にそういう提案に対してはできる限り一緒にしようとなると思うので、そのような形があると思います。**羽場：** 私は3つのアプローチを紹介したいと思います。

一つめは、私が住んでいる阿智村の例です。阿智村は、協働の村という理念を掲げて頑張っています。村には「村づくり委員会」という登録制度がありまして、そこに5人以上の会員を作って登録するとお金も出るし、村もその政策提言を受け付けます。

そこに図書室づくりの研究会が組織されて、みんなでその中身を考えて村に提言しました。村はその提言にもとづいて図書室改修を行い、村の費用で司書さんを雇用し、運営はそのグループに任

せました。そこでは、先ほど渡部さんの活動に似たさまざまな図書館らしからぬ活動を、住民の皆さんが中心になって進めています。来館される方とカウンターに座っている方の距離がもともと近いものですから、共に考え共に行動しようというやり方がうまくいくのでしょうか。

二つめは、私の財団で小さな美術館を持っていますが、その例です。これは手作り美術館ですが、作家に参加していただいて企画展を計画します。展示方法も作家の方と一緒に考えます。このように小さな市民ギャラリーとメインホールの展示は参画型で計画されます。

それから、三つめは、飯田市の図書館の例です。飯田市立図書館は司書の方々が伝統的にとても優れた図書館運営をやっていて、読み聞かせ、絵本、講演会など、いろいろな企画、アイデアを出しています。それから特に図書館の資料調査が大変優れていまして、海外の文献も、さまざまな大学の文献もどこまでも手を伸ばしてくれて、市民のためなら大量な調査もいとわずにしてくださいます。そこで培った人間関係がたくさんありまして、地域研究がとても盛んです。そういった方々の考えをうまく取り込んで、さまざまな運営をされています。

以上三つのアプローチはそれぞれ違いますが、結構うまくいっており、いろいろなやり方があるのではないかと思います。

渡部： 図書館ということですが、私はもともと現場で、地域の実態に照らしてどう図書館をつくっていくかという視点から、図書館を用意しました。まず地域のいろいろな活動を保障しました。例えば展示スペースには市民向けのスペースもあります。先ほどのコウモリの情報を提供できたり、ボランティアも、ピアノ演奏ボランティアが来たり、この間はブラジル人の子どもたちがサンバを踊ってくれたり、図書館か博物館か分からないような表現をされています。ところが、今どういっわけか図書館はある活動に特化したイメージを与えている。そのことに対して私はそうではなくて、図書館法の趣旨や、法からいってもこういうこともできるという思いから、自分の活動を展開していました。

また、住民がかかわる中で、コミュニケーションの場をととても大事にしています。だから、時々集落の区長さんから、まちづくりはどのようなことをやるのかという相談を受けることもあります。

従来の図書館の発想でいくと、そんなのは図書館の仕事ではないと思われるかもしれませんが、でもこれは生涯学習の場と考えていくと、全然間違った方向ではなくて、法律にもちゃんと支援してもらっていますので、そういう中でいろいろな可能性を秘めているのが私は図書館だと思います。

去年の9月6日にNHKの「生活ほっとモーニング」という番組で1時間ほど図書館特集をやりました。そこで全国の図書館を紹介した最後に、うちの図書館が紹介されていましたが、住民が図書館を使ってどう変わったかという部分でした。ほかのところは図書館館内のシステムの紹介でしたが、うちの利用者の方は図書館の出会いから結局は回想法まで辿り着いていって、自分の住んでいる集落に帰って回想法をどんどん広めて、そこで図書館で学んだ成果を活かして集落づくりに参加している。そのような気持ちにさせたのは図書館での本の出会いだとか、図書館が私の人生を変えたとか言っているのである。私はそうしたお言葉に支えられて、ここで何十年か仕事をやっています。今から8年前、私が滋賀に来て2~3年たったところに、大分での職員時代に図書館の仕事を通して出会ったご婦人が私を捜しだして、「あなたに出会ったことが、私の人生の最高の喜びでした。自分の人生を豊かにしてくれた。もう後数年の命しかないので死ぬ前に最後のお礼が言いたい。」というお言葉をいただきました。

生涯学習の場で働いている人たちは、そういった経験をたくさん現場の中で感じているから、非常に逆境の中で苦しい立場にあるかもしれませんがそういうことが支えになり、市民の声が自分の仕事を次に向けるエネルギーになっているということを感じています。

根本： 私も図書館にかかわる者として、今のことは本当に非常に根本的な問題だと受け止めます。渡部さんもおっしゃっていたように、図書館というか行政は、自分たちで仕事をまず組み立てて、予算などの形で事業化したところの範囲でやる。先ほど箱物というお話がありましたが、すべてのものにはある箱というか枠があって、そこを用意することで行政サービスが一応完結する。そういうことを前提にしていますので、余計なことはやらないというか、何かやるためには、また別の資源を投入しないと駄目だという思い込みが強い。だから、何か新しいことをやるためには何かを削るという発想になるのですが、図書館のように地

域の情報と貸料は具体的でなおかつ範囲があまりはっきりしていないものになると、どこまでやるべきかは従来の枠組的、箱物的な発想からは出てこない。先ほどソフトウェアを言われたのは、そういう意味合いだと思っています。このことは今図書館を指定管理にするなど、できるだけ安上がりにするような逆の要因にもなっていると思います。

ただ、どこまでも広げていけるかという部分は、やはり難しい問題です。それこそまさに経営の問題ですが、前提の部分をもう一度見直す必要があって、その辺の提言は渡部さんも私もある程度同じような立場で発言しているところですが、難しい問題ではあります。これは別に図書館に限らず、行政全般の問題です。今日はどちらかという民間の立場からのお話になりますが、今のよう疑問が従来の行政スタッフに対して出てくるのは当然でしょう。行政は行政の側でももう一度それをつくり直そうという動きはあります。横浜市の場合も、私は詳しいことはよく分かりませんが、住民の方を巻き込んで何かやりたいというのはあっても、余計な仕事を抱えてしまったらという部分もあるかもしれませんし、慎重になっているところかもしれません。

7 生涯学習活動の価値の問題

羽場： 今の話をお聞きしていて、私はやはり一番大事なのは人間ではないかと改めてかみしめました。というのは、どんなつまらない、古めかしい、蔵書もあまりそろってない、図書館でもあるいは民間の私たちのような施設にしても、問題はそこに楽しい人、あるいは自分が引き付けられる人、そこで学ぼうとか一緒に何かやりたいと思わせる人がいることが最も大事で、それさえ何とかなっていれば、住民の皆さんと地域の人たちと何かやっていける、あるいは公の職員の方々と一緒にやっていけるのではないのでしょうか。

私が大学院にいてちょっと心配だったのは、学問の対象としてハードやソフトを見たり、あるいは人を見ることはできても、一緒に関って、ものを見たり、感じたり、泣いたり、笑ったりしながら、ことの本質を見ていくことがややもすると忘れられがちになるところです。これは、優秀な人が集まる大学であればあるほど心配という感じがしています。

内田： 今の話は本当にそのとおりだと思います。もう一つ補足ですが、学ぶ場合に生涯学習という場は大事なのですが、そこで中身のどういう思想、どういうテーマという、もう少し基礎的な価値の部分で共通していないと、なかなか一緒に学ぶといっても学べないということは、特に行政と一緒にやるときに感じます。

私たちの団体は、人が持続的に地域の中や自分たちの暮らしの現場で生きていけるように、それが日本の自分の話だけではなくて、隣の人もそうだし、もっといえば世界中の人たちが安心して食べていかれる世界をつくりたい、そういうところに今価値を置いています。難しい単語では、人権、環境、平和ということに基づいて活動をつくっています。

恐らくここにいるほとんどの方は、それはそうだと思うのですが、やはり場としてだけ見ると、例えば今市場原理の中でどうやってもうけていくかというセミナーの場所もあるわけです。それも広い意味では社会教育の場だったりします。そのあたりは私たちのような活動をしていると、率直なところなかなか難しいと思うところでもあります。

それでお二方にも聞いていきたいのですが、ご活動されている中でどういう価値を重んじてやっているのか。やはり何でもありでできる部分とできない部分があると思いますし、あと地域の中でやると、利害というか住民同士で意見が違う方がいたり、あるいは町内や村内では多数決がすごくやりにくいと伺ったことがあります。つまり和を重んじるではありませんが、そこで賛成、反対がはっきりしてしまうと、結構日常の人間関係にもひびが入ってしまうところがあるらしく、そのあたりを伺えたらと思います。

渡部： 教育長の立場を超えて、若いころの思い出話ということでお聞きください。今の利害対立のことですが、祖母傾山という九州山地の山の自然保護運動にかかわったときに、すぐ賛成、反対ということになってしまうので、私たち若者で「自然を守る会をつくらなくても済むようにする会」というのをつくりました。それは自然を守る会ができたときには、もう自然が破壊されている段階だから、その前の学習活動を豊かにしていこうということで、賛成、反対という議論ではなくて、その前段階の議論をしようという形でやりましたが、それが結構うまくいきました。ちなみに一緒に

にやっていた者が、今年の4月にそこの市長になりました。そのように地道な活動の中で、理解をいただく。だから利害関係で見られる前に、やはり1歩引いて客観的にものをみつめるという形を取る。すぐに利害関係の土俵になってしまうと、そこで終わりというところもありますので、そういうことは注意をしました。

それともう一つ、私がなぜ大学院へ行ったかということをお話ししますと、やはり1つの研究的な方法論を学びたかったのです。小さな町にいるいろいろな仕事があります。それをどう自分なりに処理していくか。自分なりにいい仕事をしていこうと思えば、研究的な方法論を学んだほうがいいという思いがずっとあったので、私はもともと教育系の院を出たのですが、考古学の論文を2〜3本書きました。その方法論が学べるということについては有り難いという思いがありました。学んだことは決して無駄ではなかったという部分もあります。

羽場： お幾つの方に大学に行かれたのですか。

渡部： 私は34歳のときです。その当時は社会人卒の入学システムがなくて、一般入試で受けました。だから後先考えずに役場を退職し、失職しました。休職制度もありませんでした。今うちの役場はどんどん大学院へ行くと、給料もやると言っています。私の場合は給料もない中で大学院に飛び込んでしまいましたが、マスターの終わりのころに町から職場復帰への道の話があり、2年前と全く同じいすに座るという経験をしました。付け加えて言えば、大学院に入る前に、研究生も経験しています。九州大学でしたが、そこの先生のご配慮で、当時私は月曜日が休みだったので、そこに全部ゼミを移していただきました。こんなことも異例です。

羽場： まさに基盤経営、基盤のマネジメントだと思います。

私は今まで野外教育財団という所属をベースにして話をしてきましたが、実はいろいろな顔を持っています。彫刻家のまね事など、さまざまなことをやっています。

その一つとして自治会会長をやっています。1300人の町内会の会長です。大変なのですが、私はその苦勞を楽しむことにしています。ここではしょっちゅう意見対立が起きます。堤防の土手を刈ることができるようになるのに1年かかりました。ある集落に自分たちの地区の土手の草刈は絶

対駄目だという人が1人いたため、堤防全体の草刈ができなくなっていました。これをどうして納得してもらったかという点、各集落の集落長さんに「1年間しっかり考えて、議論してください。」とお願ひしました。そうしたら1年の間に、「土手を通りたい。」「草を刈りたい。」という意見が、あっちこっちから上がってきました。最後の会議で「さあ、皆さんどうしますか?」とお聞きしました。1年かかって各集落から上がってきた意見を前にして、駄目だと言っていた人もついに賛成してくれました。今月6月にその草刈を実施しました。

私には地域史の研究者という顔もあります。地元の商工会が大河ドラマ観光にあやかりたいということで、町の真正面の山頂に「信玄のろし台」という看板をドーンと出してしまいました。研究者は目を覆いました。これは事実と反します。したがってこれを書き換えなければなりません。しかし、これを直ちに換えようとする、商工会には有力者がたくさんいて、大変なことになります。そこで、私は村の文化財委員会の副委員長です。そこで、県教委に相談し、専門家を派遣してもらい調査を行いました。その結果を踏まえ、これはのろし台どころではなく立派な城で「駒場城」であるという趣旨の講演会と現地学習会を行いました。専門家の話を聞いた商工会の皆さんは「看板を直す必要がある」という意見で一致しました。村文化財の指定も4月に終わりました。このように不可能と思われていた壁を調査研究と学習によって乗り越えました。今度東大のゼミの皆さんが来たときには、のろし台の大きい看板が、「駒場城址公園」に変わるとお思いますので、お楽しみに。

時には思想的な問題に直面することもあります。具体例でいうと、私は満蒙開拓平和記念館という博物館を造るお手伝いをしています。これは極めて悲しい負の遺産を未来の資産に変えようという運動です。この記念館の設立には賛成反対の問題が内在します。記念館を造れるか造れないか、非常に胃の痛くなるような問題ですが、これも学習によってしか解決しないのではないかと思います。みんなで学習する機会をつくって、その中で答えを見つけていこうとしています。

このように、意見対立があるけれども、これを解決していく手段は、対話・調査研究・学習しかないのではないかと思います。

渡部： 私が働いていた職場の職員が、通信教育

で修士号を取りました。彼女が初めて修士論文以外に仕事として論文をまとめたのが、1週間前に出来上がりました。70ページのもので、以前はできなかったのですが、研究的に文章にできる、表現ができるということでチャレンジしてもらって、冊子にまとめてくれました。うちの職員もそうやって何人か論文が書けるようになって、研究者として共同研究ができるようになりました。

8 学ぶ意欲はどこから来るのか

根本： だんだんと価値の対立をどう調整するか、どう解決するかというような、かなり深刻かつ難しい問題となってきましたが、その中で学習、対話、研究も大事だというお話で、こちらが意図していたところにだんだん近づいてきたような気がします。

大学院を志望されている方もいらっしゃると思いますが、大学院生もいますし、研究の関係で何かご発言はありませんか。

質問者3： 図書館情報学研究室博士課程に在籍しています。学校図書館の学校司書をやっていて、やはり渡部先生のように、拡張する学校図書館をずっとやってきています。今までの議論は、意見がある人が意見表明する場をどのようにつくっていくかという話だったと思いますが、学校の場合、意見を言っていないと考えている子どものほうが少なく、意見を言っていないと考える人たちでも、やりたいことがあったらやれる場所をどうつくるかということのほうの課題が大きくて、そのところをどのように考えているか知らないので、

渡部： やはり言論というのはとても大事だと思います。学校図書館に関しては、まだまだ都道府県格差が非常に激しくて、学校に司書がいなくてもありますので、まずは条件整備からしていき、学校図書館は学校の中のいろいろなヒエラルキーの中の低位に置かれていますが、何とか普通の教科と同じような環境づくりから始めていかないといけないと思っています。私どもは公共図書館の整備をした次の段階として、ことしから学校図書館にも力を入れています

おっしゃるように意見を述べたりという自由な感じの、学校の中で保障された空間づくりは非常に大切だと思いますが、これから取り組むところですか。お答えになっていないかもしれませんが。

質問者3： 学校図書館でということではなくて、ご自分のフィールドで、意見をあまり持ってないように見える人をどのように考えてお仕事をされてきたかということが知りたいのですが。

渡部： 持ってないように見える人については、潜在的な力を中に秘められていると思いますので、それぞれ思っていることを出していくことが、図書館のゴールではないかと思っています。民主主義社会を根底から支えていくのは図書館だと思いますので、多様な意見がどんどん出てくることは図書館にとっての使命だと思います。それをここで言うと差し障りがあるので、現実のうちがどう展開していくか見ていただければ、お答えになるかもしれません。図書館ができたときとできた後を比較していただければ、それは明らかだと思います。

内田： そういう問題に私たちもよく直面しています。広く言うと NGO、NPO の活動はやはりまだなかなか認知されていないので、日本の市民の多くの人たちに自分たちが取り組んでいる課題をどうやって伝えるかという場合に、やはり意見を持ってない人はいないので、あまり説教くさくなく、一緒に考えてみましょうという語り口で、入り口はできるだけ優しくというか、同じところに立って語り掛けることを心掛けていますが、一般論であり役に立つ答えではないですね。

質問者3： できれば具体的にお願いします。

内田： 特に偏差値の高い大学からいらした方は、よく考えているのですが体が追い付いていないところがあって、NGO は集会を開いたり、いろいろなキャンペーンをやったり結構肉體勝負のようなところもあるので、そういうときに私たちが「もっとこれは早くやれ」とかすごく怒ると、目からうるここというような顔をして、これまでの価値観が崩れたりされていますが、それはやはりある種の問題意識を持っている方ですね。

ご指摘の提案は、比較的小さい子どもさんですか。

質問者3： 高校です。

内田： 私たちも共通した問題意識は持っています。つまりそれは学習以前の、人間としての成長とか、自分がここにいてもいいという承認されている安心感とか、意見を持つとか、人に伝えたいというようなすごく根深い問題として私は受け止めました。それ自体は今具体的な答えが出せませんが、それこそ小学校とか幼児期からの根深い

問題で、確かに意見を自分の意見として自信を持って言える子どもたちは、とても少なくなったと思います。すみません、お答えになっていませんが。

羽場： 全然答えにならない答えに挑戦します。

自由に発言できたり、自由に行動できる社会をつくるということは、不自由さを知るといって、不自由さを工夫して、これをエンパワーメントで、自分自身を作り替えたり、ルールを作ったりして、働き掛けていく人間を育てることだと私は考えています。ちょっと大言壮語ですね。

図書館で発言がないというのは、子どもが自由でない状況を示していると思われるわけです。要するにがんじがらめになったままの発言できない状態ではないのかと思われます。確かに偏差値の問題や、学校のいろいろな伝統の問題があって難しいかと思いますが、子育ての原則からいえば、まずその一人ひとりの個性を認めてあげて、共感の空間をつくるのが大事だと思います。それによってものが発信・発言できる雰囲気が出てくると思います。それは高校生でも同じだろうと思います。

個へのアプローチは、まず、認め、受け止める空間をつくること、それは人の一生のいつの段階でも必要なことでしょう。そしてそのように受け止められていると感じられる空間の中から個々の意見や疑問を引き出していくことができのらうと思います。このような現場の工夫は、どの段階でも、いつの段階でも、必要ではないかと思えます。

一方、実は構造的な問題があって頭が痛いところがあります。例えば小学校や中学校の問題ですと、例えば都道府県の教育委員会が一括して教員を採用して域内に定期的に再配置していくシステムを取っていますが、これを続ける限り、個々の地域の実情や地域の思いをくみ上げてその解決策を打ち出していくような学校教育には、なかなかなりにくいと思います。乳幼児教育、初等教育、中等教育がきっちりしていることが、生涯学習を支援していく上で非常に大事であり、特に図書館をどのように使っていくか、そこでどのように発信できる人間を育てていくかということは大事なことです。これは現場の工夫だけでうまくいく話ではなくて、行政システムや財政システムの問題でもあります。特に東大に入ってこられるような方々は、そういう全体構造を造り替えていくよう

な職場につく可能性が高いわけで、創造的な現場をつくり出すための研究をどうかたくさんしていただきたいと思います。

影浦： 質問者3に対する質問ですが、意見は言えないと駄目ですか。持っている人のものを引き出すというのは、私だったら絶対に拒否して行かなくなると思います。

つまり意見を表明したり、どういう形でしたいという場は人それぞれ違うと思います。例えば大学院のゼミで、私と同じペースで議論をしなさいと強制され、それができなかつたら駄目だと言われたら、皆さんきつと思います。それと違い、でもやらなくてはいけないとか、でも意見は交換しなくてはいけないというのは、そもそもどういうことなのか、説明してください。

質問者3： 全員が意見が言えるタイプの人間になってほしいと思って、言っているものではありません。インフラとしての基盤としての図書館や公民館やNPOは、皆さんみんなのものだと、みんなのものにしていきたいと言われました。みんなのものというのは一体どういうことか。仕事をしていてすべての利用者が利用できるようにするという課題を常に突き付けられるので、本当の意味でみんなのものとしてのインフラになるということはどういうことなのか、いつも分からないところだったので、先ほどのような質問になりました。

根本： もっとこの議論を続けたいのはやまやまなのですが、時間になったので、一言まとめをして終わりにします。最後にあったような議論が、多分生涯学習基盤経営を考える本質的な問題につながっていると思います。このコースというのは、もともとは戦後教育、新教育の中で教育基本法、社会教育法、その後の図書館法、博物館法などができたときにスタートしています。そのときの理念は、もちろんアメリカ流の新しい憲法に基づく啓蒙思想があったことは間違いありません。

社会教育、生涯学習、図書館、博物館という場は、まさに日本の統制化された学校化社会に対してアンチ制度として設定されたものです。制度的にはそうだと思います。いまだもって、やはり学校、大学が文部科学省の中心です。そのメインストリームのいろいろな限界が、先ほどの質問者3の方のようなお話にもなると思います。

多様な学習ニーズ、多様な発達、多様な意見表明のパターン、さまざまな人がいるけれども、学校の中ではやはりある画一的な評価に結果的にな

っている部分がある。もちろんそれを解消するようないろいろな努力はありますが、そうではないものは実は最初から戦後教育の中に、社会教育という形で埋め込まれていたと思います。ただ、これは簡単に統合できるようなものになっていかなかった。公的な制度の限界を民間の運動体や組織がすくい上げようとしている部分もあるわけで、それら全体を「生涯学習基盤」と呼びたいということでは。

今ここにいるお三方がそれぞれの立場からいろいろな話をされて、どれも非常に重要なお話でした。最後の学ぶ意欲そのものがどこからどうやって出てくるのか、もともとは家庭内、あるいは学校教育の中でつくられるものだと思いますが、これと違うパターンを生涯学習・社会教育という形でわれわれがどれだけ担えるかというのが今後の大きな検討課題だということが示されたのではないかと思います。

これからというところで終わらざるをえないのは残念ですが、参加の皆さんがそれぞれ持ち帰っていただければと思います。いずれの日にか、得られた回答をもって大学院に入っていただき一緒に議論できれば、今日の目的は十分に達することができたということになるのでしょうか。ご参加ありがとうございました。

Panel Discussion: What are Infrastructures to Support People's Life-long Learning Activities?

Panelists: Shoko UCHIDA † Mutsumi HABA †† Mikio WATANABE †††

Moderator: Akira NEMOTO ††††

† Secretary general, Pacific Asia Resource Center (PARC)

†† Director, Outdoor Education Research Foundation

††† Superintendent, Board of Education, Aisho-cho, Shiga Prefecture

†††† Graduate School of Education, the University of Tokyo

This panel discussion was held on June 13th 2009 at the Graduate School of Education, the University of Tokyo. Three panelists talked freely about life-long learning infrastructures based on their life histories and their experiences through the activities and movements they have ever committed.

Keyword: Life-long Learning, Adult Education, Social Movement, Libraries